

Tüxen 教授の思い出

越 智 春 美

Erinnerungen an Prof. Dr. R. Tüxen in Japan

von Harumi OCHI

「Tüxen 教授が鳥取県にも行かれることになったぞ。鳥取県下の案内は越智君に任せるから……。」との故堀川芳雄先生から直々のお電話があり、それがきっかけとなって、同教授にお目にかかることになった。因美線経由の列車で来られた同教授一行をプラットホームに出迎えたのは1940年の秋だったと思うが、その時の光景が、今でも私の脳裡にはっきりとやきついている。同教授と交歓できたのは3—4日であるが、若干の印象を書いてみたい。

同教授は当時すでに70才になっておられた筈であるが、なおかつ精力的な学究者であり、また、極めて卒直明快な方であった。私はその日現地には同行できず、夕方宿舎の「白兔荘」に行ったが、同行の鈴木さんや宮脇君が、宿泊者は入れない調理場に入出入りしながら、「何とかならないか……。」などと話している。きいてみると、Tüxen 教授が「砂丘から持帰った土壌サンプルを焼いてみる。」と喋りかかるとの事である。とうとう炊事用のガスコンロで何とかすませたらしいが、それがすんで後われわれはやっと会食にありつけた次第であった。当時すでにヨーロッパのスイス学派の生態学者たちは、植生と土壌との関係を非常に重視する傾向が強く、そのための現地での観察や実験が盛んに行われていたように見受けられるが、Tüxen 教授のそのような態度も、その一つの表われであったのだろうか。それにしても、「なかなかやるものだ」との感を深くした一幕であった。

大山で川原ぞいに植物をみて歩かれた時、同教授はヒメヤシブシに目をとめられた。本田正次著の「日本植物名彙」を便りに学名を申しあげると、“Betula? No, no, it is Alnus! You are wrong!” 喋りかかれない。こちらは、“It is true. You are absolutely wrong!” とやりかえす。しばらく歩いたところで果実のついたものがあって、それをお目かけると納得されて、“Oh! I have had a mistake! You have been correct!” と卒直に言われた。同教授は卒直明快そのものだ。

お別れする前に Tüxen 教授が、「あなたは、私の行きたい所や見たいものを実によく見せてくれたが、あなたの意見はあまり言われなかったが……。」などと面白い質問をされた。私は、「私はコケの分類学徒であって、高等植物の生態についてはあまり知らない。また自然科学者としてのあなたを案内するのが私の役目なのだから、御希望によって案内は一生懸命するが、自然から学ぶのはあなた御自身だと思うからです。」と申しあげると、同教授は、私の手をしっかりと握られて、「あなたの考えや態度は正しい。あなたがドイツに来られたら私も同じようにしてご案内しましょう。」と言われた。白髪瘦躯の Tüxen 教授の面影が今でも忘れられない。